

1. 序論

悔い改めはしばしば痛みや苦しみが伴います。自分の罪と向き合うことから出来るだけ遠ざかりたいというのが自然な反応かもしれません。ですが、自分の罪を悔い改めるところに神さまの救いと祝福があることを聖書は教えています。

2. 本論

2.1. 悔い改めとは

悔い改めというのはよく「立ち返る」「方向を変える」ことだと言われます。今まで神さまに背を向けていた歩みから、180度方向転換をします。神さまの方へ向きを変えます。悔い改めとは、今までの歩みを悔いて、もう以前のような悪しき思い、悪しき習慣を捨てて、神さまの方に向きを変えることです。

2.2. 罪を悲しみ、悔い改める（ヨエル書2章12-14節）

ヨエル書2章12節「心のすべてをもって…わたしのもとに帰れ」とあります。心からの、徹底的な悔い改めをささげなさいと言います。心の一部分が変わったというわけではありません。心のすべて、心全体が変わるということです。

そして「断食と涙と嘆きをもって、わたしのもとに帰れ」とも言います。心のすべてをもって、心全体が神さまの方に向きを変えるというのは「断食と涙と嘆き」が伴います。断食には痛みがあります。そして涙、嘆きはそのままの通り、悲しみの表現です。

ですから、心からの悔い改めには、痛みがあり、悲しみがあります。神さまに背いてしまったという悲しみ、苦しみです。心からの悔い改めには罪を悲しむという要素があります。

そのことをさらに説明しているのが13節の前半です。「衣ではなく、あなたがたの心を引き裂け」。当時の人々は、自分の悲しみを表すとき衣を裂いていました。衣を裂くこと自体は悲しみの表現ですが、その悲しみの表現が見せかけのものになるなど語っています。上っ面だけで悔い改めるな。自分の罪を覚えて、悲しんで、心のすべてを変えなさいと語っています。

ですが残念なことに、自分の罪と向き合いたくないというのが私たちの現実なのではないかと思います。悔い改めには痛みと悲しみが伴います。自分の罪と向き合って、自分の心を引き裂きたくない。出来るだけ、悔い改めを先延ばしにしたい、遠ざかりたいというのが私たちの本音ではないかと思います。

それでも、神さまは私たちに悔い改めて、わたしに「立ち返れ」「わたしのもとに帰れ」とおっしゃっています。それは、神さまのもとにはあわれみがあるからです。13節後半「あなたがたの神、主に立ち返れ。主は情け深く、あわれみ深い」。

2.3. 神さまのあわれみ（ルカの福音書18章9-14節）

他の聖書箇所から、悔い改めと神さまのあわれみについて見たいと思います。ルカの福音書18章9節から。

私たちは、このイエスさまのたとえ話を通して、悔い改めについて知ることができます。

取税人は遠く離れて立ち、目を天に向けようとせず、自分の胸をたたきました。おそらく、聖い神さまの前に自分が罪人であることを自覚していたからでしょう。罪を犯したことの悲しみがあったからでしょう。でもこの取税人は、自分の罪を赦してくださる神さまのあわれみを信じていました。だからこそ、こう祈ることができました。「神様、罪人の私をあわれんでください」。

神さまのあわれみに向かっていきます。神さまのあわれみに信頼するしかないことをこの取税人は分かっていました。神さまのあわれみに信頼して、自分の罪を悔い改めるとき、私たちの罪は赦されます。悔い改めるなら、神さまはあなたの罪を必ず赦してくださいます。神さまはあわれみ深いからです。

3. 結論・適用

神さまのあわれみに信頼するからこそ、私たちは自分の罪と向き合い、悲しみ、捨てることができます。神さまの懷で、罪が赦された平安を得ることができます。「神様、罪人の私をあわれんでください」。この祈りを自分のもの、生涯のものとしてさせていただきたいと願います。